

## 40周年記念号の発刊に寄せて

学 長 土 井 修

「研究論集」の40周年記念号（第70号）が発刊され、お慶び申し上げます。「継続は力なり」といいますが、これまでの40年間、70冊の「研究論集」が刊行されたことによって、経済学部の「研究力」も着実に上昇してきたと言えるでしょう。現在、大規模大学と小規模大学、大学院のある大学とそうでない大学の間には、研究および研究条件における格差が生じているとも言われています。しかし、大学である限り研究を止めるわけにはいきません。大学の社会的責務として、今後もさらに研究の充実を図り、より良い研究成果を挙げていく必要があります。

40周年記念号発刊のお祝いの言葉として、これまでの私の執筆経験から考えた「研究論集」についての長所および短所を指摘しておきたいと思います。まず、「研究論集」の長所は、いわゆるレフリー制度を採用していないため、自由に執筆できるということです。この「自由」は非常に大切でして、理論であれ実証であれ、いろいろな考え方や研究結果を誰からも干渉を受けずに自由に発表できるのは極めて重要なことです。研究者にとって、いつでも自由に執筆できる「場」があるというのは素晴らしいことです。

他方、「研究論集」の短所ですが、「研究論集」に限らず、一般に大学の学術誌は、学会誌など他の学術誌とは異なり、研究者の目にあまり触れられない。あるいは、真偽のほどはわからないもの

の、レフリー制度がないこともあって、やや評価が低いとも言われています。したがって、「研究論集」に執筆したものをなるべく早くまとめて著書として刊行するとか、学会で発表するとか、対外的にアピールする必要があると思います。研究成果を私的に抱え込まず、公的に明らかにしていく努力も必要で、そのことは逆に研究意欲の増進・研究成果の向上に繋がると思います。

最後に、「研究論集」がいつまでも発刊され、より良い研究成果を生み出していくことを祈念いたします。